①鳴子小学校５年生の田植えの様子
②昔ながらの天日干しでくいがけの稲刈り③先生の梅干し作り

地産地消の推進

地元で生産されたものを地元で消費する「地産地消」は、学校給食にも取り入れています。

地元の安全で新鮮な農産物を確保するため、学校、学校給食センターや生産者、農協などの生産団体と連携を図りながら、計画的で安定的に食材を供給できる体制を作っています。

地元の農作物の利用は、野菜などが一番おいしく、たくさん栄養がある「旬」について学ぶ機会にもなります。

食農教育の推進

スーパーマーケットなどで魚の切り身や野菜が切って売られ、魚や野菜の本当の姿や名前を知らない人が増えています。

食農教育は「食」と、それを支える農業の体験を通して、自然と人とのかかわりを学習し、食材の生産について理解し、作り手への感謝の気持ちを育てます。

各学校で地元の人の協力を得て、いろいろな農業の体験学習を行っています。

鳴子小学校では、今年度は文部科学省の「食育推進事業」の指定を受け、体験学習に力を入れています。

五年生がＮＰＯ法人鳴子の米プロジェクト代表上野健夫（たてお）さんの指導により、鳴子の米「ゆきむすび」の栽培をしました。田植えや草取り、稲刈りなどで何度も田んぼに足を運びました。この経験で子どもたちは労働の大変さや、米になるまでにいくつもの手間がかかることを学びました。

また、一、二年生が地元で野菜などを直売している団体の「石の梅こいこいクラブ」で栽培している梅を収穫し、その梅で先生たちが同クラブ会員の指導を受け、梅干しを作りました。

十一月には、五年生が収穫した「ゆきむすび」と先生たちが漬けた梅干しで、食にかかわる人が集まり郷土の食文化を研究している「おおさき楽友会」の会員の指導により、子どもたちがおにぎりを作ります。

「まごころ」込めて安全で新鮮な野菜を提供

田尻地域北小松野菜部会

私たちは、たじり穂波公社を通じて、平成15年から田尻学校給食センターにネギ、キャベツ、玉ねぎ、白菜、ホウレン草、小松菜、大根などの野菜を出荷しています。

給食センターに出荷する以前から低農薬、低化学肥料で野菜作りに取り組んでいたので、給食センターの基準などが厳しいと思ったことはありません。昨年は放射能汚染の問題があり、部会員すべての土壌を検査し、放射性物質などの問題がないことがわかり安心しました。やはり子どもたちが口にするものなので、安心、安全が一番です。

旬な野菜の提供や数量の確保のため、月に一回、たじり穂波公社と打ち合わせを行っています。野菜作りは天候に左右され、数量が確保できないことなどもありますが、みんなで協力し合って出荷します。安定的に供給するため、作付けをどうするかなどを話し合って、いろいろ研究しています。

年に一回、子どもたちと交流会があり、私たちが講師として野菜作りについて話します。子どもたちからいろいろな質問を受け、関心を持っていることを実感します。また、感謝状やお礼の言葉をもらい「これからも頑張ろう」と励みになります。

部会員７人のうち集まった４人（左から）髙橋久義さん、大友賢一さん、佐々木タイセさん、大友とき子さん。苗は給食センターに12月出荷するみず菜、春に出荷するキャベツ

感謝の心

「食」は私たちの日常生活の中で大きな割合を占めています。

また、「食」は農林水産業のみならず、製造業やサービス業などさまざまな分野の多くの人たちによって支えられています。

「食べる」ことは、米や野菜、果物、豚や牛、鶏などの家畜、魚などの生きている命をいただくことです。私たちは「食べる」ことで命をつないでいます。

このように「食べる」ことの意味やその過程を理解し、食を支える多くの人たちと食品に対して感謝を持つことが大切です。食事のときに「いただきます」、「ごちそうさまでした」、「ありがとう」とあいさつをする習慣を身に付けることが大切です。

また、「もったいない」という気持ちの感謝の心をはぐくみ、家庭などから出る食べ残しや買い過ぎによる食品の廃棄などを減らすことにもつながります。

食育の第一歩は家族みんなの笑顔とあいさつから！！

家庭での食育を難しく考えていませんか。

家族みんなで食卓を囲むこと
和やかな雰囲気で食事をすること
食事の前や後に『いただきます』『ごちそうさまでした』とあいさつをすること
食べ残しをしないこと

さあ、みなさんの家庭でも今日から食育を始めてみませんか。

市長コラム 天・地・人

イザベラ・バード回想

みなさん、イザベラ・バードという人を知っていますか。イザベラ・バードはイギリスの旅行家・紀行作家で、西洋の女性として初めて明治時代の東北地方を旅行し「日本奥地紀行」で世界に東北地方を紹介した人です。先日、山形県南陽市のハイジアパーク南陽の一角に開設されているイザベラバード記念コーナーを訪れる機会がありました。

イザベラ・バードが東北の美しさに感嘆し「実り豊かに微笑する大地」「東洋のアルカディア（理想郷）」と表現し、置賜（おきたま）地方の農村風景を「鋤（すき）で耕したというより鉛筆で描いたように美しい」とたたえています。

また、赤湯温泉の湯治風景に強い関心を示し「エデンの園」と、世界で日本（東北地方）ほど女性が安全に旅行できる国はないとも評しています。

昨年三月十一日、私たちは東日本大震災という大きな試練に見舞われました。尊い多くの命が失われ、生活の基盤が激しく揺さぶられました。しかし、そのような中にあっても日本の原風景とも言うべき美しいふるさとを愛する姿、互いに助け合う絆（きずな）は不滅でした。世界に共感と称賛の輪が広がりました。

もし、イザベラ・バードが百三十年の時を経て、現在の大崎を訪れ豊かな自然、資源の宝庫、温かな人情に触れたらなんと表現していただけるだろうか。

震災復興を契機に誇りと愛着を持って、平成のアルカディアをめざした東北新時代へのルネサンス「真の豊かさ　連携と協働による大崎の創生」を実現してまいりましょう。

大崎市長　伊藤康志